青い鳥の幸せ

マコンブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青い鳥の幸せ

【Ｎコード】
Ｎ５１１９Ｑ

【作者名】
マコンブ

【あらすじ】
「空の先輩方とお友達になりましてよ？」

秘密めいたセシリアの笑みに誘われ、一夏は寒空の下一人、こっそりと抜け出す・・
人物（特に一夏）がアニメ寄り設定のＩＳ日常短編、

（前書き）

季節は冬、
アニメとコミックしかみたこと無いので、まだ一夏、ほうき、セシリアしかいません・・他のキャラクターについても書いてみたいと思っているので、よろしければお付き合いください。

チチチ・・

スズメ、ジジュウカラ、マヒワ・・

日本には人家近くに現れる鳥が本当に多い。

もちろん母国にも、ガーデニングなどに没頭する傍らで羽繕い等をする姿をよく見かけたのだが・・人に良く慣れ、あまつさえ芸をするようになるなどとは想像だにできなかった。

「・・人と同じように、鳥も平和ボケしているのかもしれませんわね」

「え？なんかいった・・っわ」

いくつもの小さな影が傍らから空へ向かって飛び立つ、

パサァッ、と軽い羽音だけを残して、彼らは再び手の届かない関係へと戻って行ってしまった・・

・・もうちょっとで手にも乗りそうだったのに、と一夏は非常に惜しそうな顔をして見上げている、

そんな彼の姿に、セシリアはしょうがないですわねと、肩をすくめてみせた、

「焦り過ぎるから、ですわ？」

「・・庶民は、色々と焦るものなんだよ、」

あと少しで小さな爪のある脚が当たる・・という所でつい堪え切

れずに手を動かしてしまった一夏に“そんなに親しくもない間柄ではあったね”とでもいうかのごとく踵を返して・・いや、翼を返して、飛んで行ってしまったのだった。

微かな溜息が白い息と共に空へと消えていく・・

それを見送って一夏は掌を下ろし、まだその中に少し残っているパン屑を人の目につかない所へと撒いた。

「うっかりして、誰かが腰を下ろさなきゃ良いけど・・」
「あら？そういうものって、意外と本人が踏むものですわ？」
「むぅ・・過去に覚えがあるだけに、何も言えねぇ」

ふふ、と両者の間に軽い笑いが起こる。

寒さが緩んだ、明るい朝、

「最近、空の先輩方と親しくなりましてよ？」というセシリアの笑みに誘われて、一夏は朝早くに彼女と待ち合わせをしたのだった。

しののののさんには内緒で、という言葉に従いこっそりと部屋を出た一夏は、待ち合わせの場所にかなり早く着いた・・はずであったが、

そこには既にセシリアの姿があって、白い顔をさらに白くさせながら佇む姿に、普段よりも強い寒気を貰った一夏はいたたまれない気持ちで、“室内で待っていてくれれば良かったのに・・”とそう言ったのだったが・・

それに彼女は、“あら？朝食会のホストが客人を待たせては、それこそ失礼でなくって？”とあらゆることに妥協をしない、不敵な笑みを見せたのだった。

そう言われてしまうと、彼女のプライドの高さを知っているだけに何も言えなくなってしまう、
セシリアは好きな相手のうなだれた様子に気付き、慌てて言いつのる。

「そ、その・・お気づかいは嬉しいのですけど、で、出来るだけ早くにお会いしたかったものですから・・い、いえそのだからといって、一時間も待つなんてことはしてませんわよ？あくまで礼節の一環として・・云々」

気遣われているという嬉しさに顔を赤らめながら、照れたように目をそらす彼女に、一夏はてっきり今日の目的の事を言っているのだと思い、“セシリアって本当に鳥が好きなんだなぁ”と言った。

そして、あまりにも似合いすぎるその組み合わせにほう・・と溜め息をつく、

（それにしても、“朝食会”って・・）

流石はシェイクスピアの国・・セシリアってロマンチストだよなぁと思う、
実際彼女は持ち物も、身につけるものもまるでおとぎ話のお姫様の様に女の子らしい・・

同じ女性でも、質実剛健をその旨とするほうきは“チャラチャラしおって・・”と、嫌悪するのだろうが・・幼馴染の立場から言わせると、彼女もそう言う可愛い所を出せば、もっととっつきやすい・・良い意味での人気者になれるのではないかと思うのだ。

本人にそう言う事を言うと、“余計な御世話だ！”と怒られるのが目に見えているので特には言わなかったが・・

そして、何故かさっきから気落ちしたように俯いているセシリアの手を取り、「うわっ冷た！！」と声を上げる、

「何だよ、もう・・寒いなら」

「いえ！寒くはありませんわよ？・・手が冷たいのはこれは・・部屋を出る時に少々焦ってしまって手袋が・・」

「ふーん？じゃほら、オレの手袋貸してやるよ・・オレの手あったかいし」

「ええ！一夏さんの手袋・・しょ、しょうがないですわね、どうしてもというのであれば、使うのもやぶさかでは無くってよ？」

「使いたいのか使いたくないのか、どっちだよ・・」

「ありがたく使わせてもらいますわ・・ただし、半分づつでしてよ？」

「？もう片方はどうするんだよ？」

「それは・・こう」

・・と言ってセシリアは手袋をはめない方の手を、オレに絡めてくる、

ひんやりとした、そして、骨格が信じられないほどに細い指先の感触がするり・・と伝わってきて、オレは今更ながらに手の汗を気にしていた。

「・・久しぶりですわね、こうやって誰かと手をつないで歩くのは」

「そういやオレもだな・・って、もうオレ達そういう年齢じゃなくなってどれくらいなんだよ？」

「なにも手を繋ぐのは両親だけとは限りませんわよ？」

「う・・そ、そうだな」
「まあ、わたくしも両親以外でしたら、ダンスパーティーくらいでしか手を取り合ったこともありませんですけど・・」
「ダンスパーティーか・・フォークダンスとかマイムマイムしか知らないな、」
「？まいむ・・とはどのようなダンスですの？」
「こう・・皆で輪になって焚き火に近づいたり離れたり」
「中々原始的なものを行っているようですわね・・よろしいですわ、簡単なワルツのステップを・・」
「また今度で良いか？今はちょっと何と言うか、身体があまり動かねえ・・」
「ふふ、うっかり押し倒していただいてもかまいませんけど・・ではまた今度、ですわね？」
「ああ、使う機会ないかもだけど・・」
「機会と言うのは作るものですわ？その点、わたくしでしたらいつでも準備がありましてよ？」

な、なので一夏さんが望むのであれば、いつでもお相手いたしますわ・・と言うセシリアに、じゃあ皆でダンスパーティーだな！と一夏が言い、さらに・・あれ？でも男パートはどうすんだ？俺一人・・それとも女の子にやってもらうのか？と悩み始めた。

そっと涙をぬぐう仕草をしてから、セシリアは負けじと、「ふふん・・そんな生ぬるいことはやりませんでしてよ？・・もちろん男性パートは一夏さん一人で、ｉｓの足さばきの訓練だと思ってやってもらいますわ！」とその不満をぶつけ、繋いだ方の手に力を入れた。

「おお！流石は結構握力あるな・・そういえば、セシリアっていつもこんな時間に起きているのか？」

「練習のある日は、そうですわね・・でも、無い日にも置いたリンゴを食べる様などを、こっそりと見に行ったりしましてよ？」
「へぇ～」
「双眼鏡も、本国のプロの方からお勧めしてもらったものを取り寄せたんですの・・これですわ」
そう言ってセシリアが取り出したのは、印字でｊａｐａｎと刻印してあるものだった。
（へぇ・・日本製なんだ、）
母国英国のことを、非常に誇りに思っているらしいセシリアからすると、意外なチョイスだと一夏は思う・・しかし、それだけそれを向ける相手に真剣だと言う事なのだろう、
彼女の話よれば、最初はサンドウィッチケースの底に残った屑を餌台の上に撒くだけのことで・・そうした状態が続いていったのちに鳥達の方から寄ってくるようになったらしい、
「日本の鳥は人に早く慣れ過ぎですわ？」となにやら小馬鹿にしたようなことを言ってはいたが、その表情は非常に嬉しそうで・・別に自分のことでも無いのにほっとする、
・・今朝も、裸の木々から降りて来た小鳥の群れで、辺りはちょっとした動物園の様になった、
セシリアに至っては何羽か手に乗っていたりする・・
空気を羽根いっぱいに含んだころころとした小鳥はいかにもかわいらしく、それを指先に乗せたセシリアはどこかの絵画から抜け出し

てきた妖精のように美しい、

それを和やかな気持ちで見ていた一夏に、本人が森の樹木の気持ちが分かりましてよ？と非常に得意そうにこちらに指先を示して見せるものだから、一夏もついつい羨ましくなったのだ。

・・逃げられてしまったが、

「野生の生き物に餌付けをすることって本当はよろしくないのですけれど・・」

「じゃあ、秘密にしておけば良いんじゃない？」

「秘密・・ええ、・・二人だけの秘密、ですわね？」

練習後すぐだったせいか、ほんのりと染まった頬でセシリアがうっとりと呟く、

ピンク色の空気をはっきりと漂わせる彼女の横で、秘密を持ちたい年頃って、あったよなぁと、どこかずれた納得の仕方をしながら、一夏はうんうんとうなづいていた。

「でも、セシリアだってこう、ちょっとずつ動いたりとか、してたじゃねえか・・何でオレの時はダメなんだ？」

「例えこちらに近づいてきたとしても、安心して動いてしまってはいけませんわよ？ゆっくりと、相手の呼吸を探って合わせることが重要ですわ、」

「相手の呼吸を探る、か、」

「ええ、」

しかし、探ると言ってもこちらとは大体、生物からして違う生き物なのである、

あんな小さな鼓動に、一体どうやって合わせていけというのか？

「例えば・・私の感覚からお教えいたしますと、ｉｓでの遠距離射撃を行う場合に少しだけ似てますわね、」

「ｉｓ・・なのか、」

「ゆっくりと・・的の動きと、そしてブルーティアーズの呼吸に合わせるんですの、専用機と合わせるのはさほど難しくありませんわよ？・・だって、あちらから合わせてくれるんですもの、」

「って！ちょっと待ってくれよ、という事は何だ？・・ｉｓを扱っているみたいに鳥と接していたのか？セシリアは、」

「・・人の話は最後までをちゃんと聞いて下さる？逆ですわ、小鳥と接するように、ブルーティアーズと接しているんですの、わたくしは」

「ｉｓが？百式が・・鳥？」

オレの身体をすっぽりと包む、装甲の厚く堅いあの百式が、手の中にすっぽりと収まるくらい小さくてふわふわな小鳥と、一緒だって！？

「そうですわ！」

「ええ～？そうかなあ」

「何かご不満がありまして？」

「鳥にしては、何かごっつくないか？」

「あら、繊細ですわよ？ｉｓは・・しかもとても臆病」

「ｉｓが臆病・・？」

「ええ、こう・・体内とのつながりを通じてって、解りますでしょ？」

「ああ」

「こちらの状態を細かく認識しますの、・・怖がっているのか？疲れているか、調子が悪くは無いか？そう言う時は１００％力を出

すことは難しいんですの・・ｉｓがこちらのコンディションに遠慮してしまうのですわ・・でも、それはつまり自分の力が足りないせいでもあるのですけれど」

そういってセシリアは辛そうにする、

ｉｓを動かしている間、一夏にはそんなことは全く感じられなかったが、きっと長い目で見るとそう言う事もあるのだろう。

その気持ちは、オレにも少し解る。

（下手にかばわれたりすると、ホント辛いよな・・）

「じゃあ、その・・もし上手く行ったらほめてあげたりしないと、へそ曲げる？」

「へそ、曲げる・・というのはわかりませんわね、」

「あっ！そうか、へそ無いもんな？」

「っ！ふ、ふふ・・確かにありませんけど、でも私が考えていたのは、そう言う事ではなくってよ？」

「どういう事なんだ？」

「そもそも、へそ曲げてどうするおつもりなんですの？」

「あ・・そうか」

「ｉｓは、相性が合う限り、いつでもわたくし達を受け止めて下さるのですわ・・受け止めきれなくなるのはいつも自分の方だってことを、認識しておいた方が良くってよ？」

「はーい・・」

「よろしいですわ・・今度ｉｓの防御機構、並びに操縦者との連携について、実践でじっくりと教えて差し上げてよ？」

「うん、頼んだ」

練習や特訓にも付き合ってもらっているせいか、セシリアといる時はいつも、同年代の友人というよりは少し年上の人か先生と一緒に居るような気持ちになった。
時々、どこにあるか良く分からないスイッチが入ってしまう他は、友人として、同輩として・・そして身近なライバルとして大分打ち解けてきた気がしている。

（ほうきの奴とは逆だよなあ・・）

昔はよく頼られたりとかもしたのに、最近は態度がめっきりと疎遠になってしまった・・そしてやはり、何かのスイッチが入ると途端に頑なになる、

・・ようするにそうしたスイッチとは、自分が他の女性が関わることが原因なのだが・・

彼は気づいていない、
非常に女心の機微に疎い彼にとって、そうした周囲３６０度を取り囲む女性達の心はｉｓの専門知識よりも複雑で・・しかし、時には逆に自分との違いを実感して感動を覚えることもある、例えば・・セシリアのｉｓを鳥に例える発想力は世辞とかで無く凄いと思う。

もしかしたら、今この時もこうして自分と笑いあったり教え合・・教えたりしているうちに、セシリアの中には何か、自分とは違う感覚や考え方が流れていたりしているのだろうか？

元々のスペックからして違うのは当たり前だとしても、そうした感覚に早く追いつきたいと思う。
そう思うのに、日常的にｉｓを身近に感じることは、自分にはほとんどなかった・・ブランクがあるとはいえ、千冬姉の言った通りオ

レには学ぶ姿勢が出来てい無いのだろうか？

そう考えてみると、確かにｉｓに対して、自分は常に・・なんというか受身である。

しかし、それには若干しょうがないところもあると思う・・なにせ、自分から何か言わなくても、周りに居る友人たちが非常に押し付けがま・・いやなにくれとなく訓練に付き合ってくれたり、勉強を助けてくれたり・・はっきり言って、自分が何かをしたいということよりも前に周囲の珍種の動物でも見るような、そして知らない所で自分に何かを求めているような・・そんな感情に応えるのが精いっぱいなのだ、

結局・・その先に何かを見出すような段階には、自分はまだたどり着けていないのだろうと、そう一夏は結論づける、

（早く、課せられた課題を全部消化しきっちゃわないとなぁ・・）

しかしそれをどういう風に消化していけば良いのかも分からず右往左往するだけの毎日に、具体的な正体も解決策も分からないままの問題が傍らに山と積まれていく・・気がする。

そんな漠然とした恐怖があることに気づいて、一夏はいまさらながらにぞっとした、

うっかりすれば・・そのものさえも見えなくなってしまうかもしれない。

（自分はいったいここで、何を成すのか・・？）

社会的な要素であれば、それは既に決まっているようなものだったが・・

社会にとって、自分とは『男性初のｉｓ使用者』という枠組みであり・・その認識は、今後ともずっとついて回ってくるだろう。

ｉｓ使用者としてでは無く一般人としての可能性はここに来た時から・・いや、百式を起動させてしまった瞬間からもう既に失われてしまった・・愛する人達を守り、皆の期待にこたえるためにもその大前提が必要であり、今後は現在の様にイエスマンではきっといられないだろう。

言い訳じみた責任転嫁をするわけでは元論無かったが、しかしそれでもｉｓ以外の可能性が自分には無いという遣る瀬無い事実には力が抜けてしまう、

その脱力感を踏み越えられるだけの力、
目標が今、切実に欲しかった。

（ここに来る前だったら、人生設計だとかも色々立てやすかったよなぁ・・）

今は、あまりにも違いすぎて・・知らない世界過ぎて思わず目が眩む、
いくら姉が世界チャンピオンだったとしても今までのオレ・・男である自分にとってのｉｓはテレビの中などでしか知り得ない、遠い世界のものであったからだ。

（ただひたすらに駆動の腕を磨いて、・・その先は？）

しかし、悩んで悩んでそれでも自分には見えないその風景も、きっと目の前の青と金に彩られた彼女・・たおやかな、しかしそれでいて決して芯から倒れたりはしない彼女なら、確固たる意志を持ってｉｓを駆り、ずっと揺らぎはしないのだろう。

・・自分とは違う、自らを高めなければならなかった彼女の境遇を思って一夏は切ない気持になる。

そのプライドの根拠となる他者との競争、
その為に努力を惜しまずして築き上げて来たもの、
もしかしたら揺らぐような覚悟など、彼女は最初から持つことは許されなかったのかもしれない・・

それらを踏破し、乗り越えた結果の代表候補生として、この場に真っ直ぐ立っているセシリアを見ると一夏の中にも、自分だって負けていられないという気持ち・・元気が湧いて来るのだ。

例えそれが、そんな気がするだけだとしても、変わらないものがあるということは、それだけでもほっとする・・そして、この先どんなに自分を取り巻く環境が変わっても、きっと彼女だけは変わらないでいてくれるのではないか・・

一夏は確信を込めて、凛としたその横顔を見つめる。

ドキドキ・・

そして、その視線の先・・セシリアは何気ない風を装いながらも、その内心は非常にうろたえていた、

（一夏が、わたくしを見つめている！？）

必死に景色を見ているふりをして、会話の糸口を探すが、しかし普段ならありそうでありえないシチュエーションに、はやまる胸は落ち着いてくれそうもなく、黙って真剣な目で見つめられると、何故か何も言えなくなってしまう・・

例えばこれが明らかに別の考えからであったり、違う相手へ向けられたものだとすれば、自分でも驚くほど大胆な行動が出来たりするのだが・・しかし、一心不乱に突き進んで、失態をやらかしたり等という事は、それこそ今までの自分では絶対にあり得なかったはずなのだ。
同時にそれが、自分の新たな可能性を示唆する様で、セシリアはその感情を誇らしくも思っている。

自分の新たな可能性・・そう、

（た、例えば・・一緒に家の跡目になっていただいて・・わたくしはお嫁さん、ですとか！？）

ぼひゅー・・とタキシードを着て隣に立っている一夏を想像して、セシリアはその考えをどんどん発展させた。
式場はいつも家族でミサに行ったあの教会で・・とか・・一緒に両親に結婚の報告をするなどなど。

（お、お墓の前で・・ち、誓いのキスとかしたら、あの人たち、妬けてしまいますわ！）

休日には一緒に薔薇の手入れをしたりして・・と、以外にもアットホームな人生プランをするセシリアであったが・・その妄想の中の一夏が『セシリアの方が綺麗だ』と顔を徐々に近づけたところで、

現実の彼が彼女に声をかけた。

「しかし、とっさに例えにｉｓの話が出て来るなんて・・本当にｉｓが好きなんだな、すごい」

「ええ！私も好きですわ！」

慌て過ぎて想像の世界と現実の世界を混同した彼女は、すでにプロポーズをうけた様な気になって、本音をポロリと漏らす・・

しかしセシリアの発した文脈的に変な言葉も、彼はどうやら別の意味でとらえてくれたようだった。

「・・オレって、ｉｓが好きみたいに見えてる？」

「あっ！？ええ！ええ見えていてよ？」

「そうか・・そうなんだ、そうなんだよなきっと・・」

「な、何ですの？しののさんのようなことを言って・・は！」

途端にセシリアがむっとした表情を作る、口癖がうつるというのはつまり・・

（それほど近くに居るってことなのですわね・・私も負けませんでしてよ！）

そうして、セシリアは、しののに負けない為にどうやったら一夏に口調を移せるか？ということを考え・・お嬢様言葉をしゃべる一夏を想像して思わずプッ・・と噴き出してしまった。

（男の方がですわ、だなんて言うのは、やっぱりちょっとおかしいかもですわね・・）

「セシリア、サンキュな？」
「ええ？・・わたくしまだ何もしてなくってよ？」
「いや、すごく嬉しかった」
「“朝食会”でしたらまたいつでもいらして下さってかまいませんわよ？むしろ、いらして下さった方が・・」
「うん、それもありがとう」
「？？？？」

一夏の中では考えていたことの全ての事柄がすっきりと完結していた。
現実がどうであれ、未来がどうであれ・・例えその先が見えなくても、自分の中にある確固たるものが

今、わかる、

「オレ、“ｉｓが好きなんだ”」
「当たり前でしてよ・・でなければ乗ったりしませんですわ？」

何よりもその気持ちが強くあったからこそ、ｉｓと真っ直ぐに向き合う事が出来た・・今までにあった可能性の全てを奪われても、落ち込まずにいられた。

（よし・・オレはｉｓと一緒に生きていこう）

・・変わらないもの、見つけた、

一夏の気持ちはまっすぐ未来へと向けて固まって行く、

まだ、迷いは色々あるけれど、

ｉｓが好きな気持ちは絶対に変わらないと、確信を持って宣言することができる。

今、オレはセシリア・・ほうき、他のｉｓ乗者、千冬姉と同じフィールドに立つことが出来ただろうか？

『その程度で感動か？まだお前はスタート地点にすら立っておらん』

想像の千冬姉がいつもの冷たい、しかしどこか暖かな表情を一夏に向ける・・まだその先があるのだと、今感じているよりももっと高みの次元があるのだと、

そう尊敬する先駆者は告げていた。

（そうだな・・これからだ、）

まだきっと、オレはスタート地点にすら立ててない・・だからこそきっと、ゴールに何があるのかもわからない。

だけど、そばにはｉｓがある・・相棒が準備して待ってる、

声援の送ってくれる人たちがいる・・頑張れ、と

一夏は強くならなくちゃな！と決意を新たにして、

やるぞー！と伸びをすると拳を前に突き出す動作をした・・だが、

しかし、

その拳先に何か柔らかいものが当たる感触がして

彼は唐突に、目の前にはそういえばセシリアがいたことを思い出し

た。

「わわ！」

「きゃっ・・わざとですの！？」

「う・・わ・・ごめん！わざとじゃないんだ！本当に・・嘘っぽく聞こえるけど」

衝動のまま周りも良く見ずにそれをやったものだから、丁度そこに居たセシリアの胸に拳の先がちょっと当たってしまったのだった・・まことに遺憾である。

（しかし・・良い感触がした）

「ま、まあ一夏さんでしたら許してあげなくもないですけど・・」

「～っ！マジでゴメン、殴って良いよ？」

「では・・責任とって下さる？」

「え？」

じっと空の深い青色の眼が、非常にうるんだまなざしでこちらを見上げてくる・・その表情は傷ついたようにも見え、一夏は本気でうろたえた、

（どうしよう・・）

「乙女の胸を・・さ、触ったのでしたら！せ！責任持って、」

リンゴーン・・と、セシリアの耳に教会の鐘の音が近く響き、タイミングをはかった様に傍らの鳩が飛び立っていく・・しかし、その鳩達が飛び立ったのはなにも別に、二人を祝福してのことでは無かった。

その少し前

・・鳩が飛び立つ前の物陰からじっと見守る少女がいた・・ファースト幼馴染、ほうきである、

（・・何話しているんだろ？）

見つけた時から真剣な顔で話しこむ彼らの様子が、非常に気にはなっているものの・・一夏が自分に黙って部屋を抜け出ていたのがネックとなり中々声をかけづらい。

（おはよう、と言って何食わぬ感じで出てきたらどうか？・・・いやそれではあからさま過ぎて気まずいな）

様子を窺っているつもりなのであろうが・・植わっている樹木の裏側に隠れ、モジモジと気を揉む動作・・動くお尻に合わせてスカートの一部と胸・・その部分を覆う制服の一部がそこからはみ出してふりふりと動いている・・

（隠れているつもりなのでしょうけど・・まる分かりですわね）

セシリアは一夏の肩越しに見えるそうした景色を見て、何をやっているんですの・・？と脱力しそうになったがしかし、一夏にはそれを気づかれないようにするため、わざと視線をそらして見ないふりをした。

しかし、彼女が隠れて出てこないのが気になる・・

（まさか・・頃合いを見計らって打ちかかろうとしているわけでは・・しののさん、）

そして・・彼女にも空気を読んで登場を控える気持ちがあったことに非常に驚く、
いつもは煩わしくなるくらい一夏、一夏とまるで自分のサーバント、あるいは執事の様に扱う癖に、

「よし！やるぞー！」

（変な所で遠慮をするんですのね・・）

ぷに、

（・・え？）

ほうきに気を取られていたセシリアに、先ほどから何か考え込んでいた一夏が、正拳突きを繰り出した。

それはあまりに急な・・とっさの出来事だったためにガードも出来ず、反応が遅れてしまったが、今胸に当たったこの感触はまさか・・？

「あわわ！」
「きゃっ・・わざとですの！？」
「う・・わ・・ごめん！わざとじゃないんだ！本当に・・嘘っぽく聞こえるけど」

（・・って、本当に嘘っぽいですわよ？一夏さん・・）

セシリアは反射的に胸の前でばってんを形作ると、むぅ～と慌てる一夏を睨んだ。

「ま、まあ一夏さんでしたら許してあげなくもないですけど・・」

「～っ！マジでゴメン、殴って良いよ？」

（本当ならすぐにでもそうした所でしたけど・・タイミングを逃してしまいましたわね、）

コンマ０，５秒考えて・・彼女は一つの妙案を思いついた。

（これなら一夏を殴らなくて済みますし、自分も嬉しいしで万々歳ですわ♪）

そしてきゅう・・と眉を寄せ、目を潤ませるとしょうがなさそうな・・ホントのホントに断腸の思いで告げるような表情でこう言う、

「では・・責任とって下さる？」

「え？」

真ん丸な瞳がセシリアにじ・・と注がれ、

その視線に彼女は、自分でも予想だにしないほど舞い上がってしまって、ついつい純白のゴスペルを脳裏に再び思い描く・・

急に真剣な顔をした彼女にで腕を引き寄せられ、一夏はどうしようか・・と迷う、

彼女が顔を近づけるにつれてふわりとローズがほのかに香ってくる・・とその時、

シュバッ！

「っ！やぁ！！一夏！！良い天気だな！」
「うわっ！！・・ほうきか、おはよう」

走り込んできたのは見慣れたほうきだった、
まるで尾を引く弾丸の様に一夏に突っ込んできた彼女だったが・・
その軌跡を予測したセシリアによって優雅に追突を避けられ、悔しそうな表情でふぅ、と乱れた息を整えて第二弾を構える。

終始、一夏はあっけにとられていたが、セシリアはずいっと前に出ると髪を後ろに掻き上げ、挑戦的なポーズをとった。

「おはようございますしののさん、いきなり凶器を振り回してまるで変質者ですわよ？」
「離れろ、」
「嫌ですわ？」

バチバチと、青天の高く透るような空の色・・そして、ぬばたまの夜の色がぶつかり合う、
一夏は後ろからこっそりとセシリアにささやく、

「なあ・・セシリア、今腕を引き寄せたのって、ほうきに気づいたからだよな？」
「ええ、そうですわ？視線を感じましたのでストーカーの方か何かと思いまして・・とっさに、」
「ストーカー？この学園って周囲から完全隔離だろ？」
「いえ・・結構多いですのよ？女ばかりの学園と知って入り込もうとする不埒な輩が・・大丈夫ですわ、大抵追い払われましてよ？」
「心配しなくても、そんな命知らずなやつはいない！一夏、騙さ

れるな！」
確かにそんな奴は命知らずだ・・と彼も思った。
昨今の女性優位社会に置いてはまず、痴漢などという犯罪行為が成立することすら難しい、
そうでなくてもここにはｉｓを扱う、恐ろしい女性達がわんさといるのだ・・しのびこんで、捕まった暁にはどうなる事やら・・
（おそろしや、おそろしや・・）
先刻一夏がセシリアの胸を触ったことについては痴漢じゃないのか？
と・・そういった疑問はさておき、ファースト幼馴染、お嬢様、そして男、はここに相対していた。

「っていうか、ほうきはどうしてここに来たんだ？道技場とか校舎の入り口は反対側だぞ？」
「・・っお前を探していたにきまっているだろう！まったく、挨拶もせずにふらふらいなくなりおって、心配しただろうが」
「ごめん、一旦戻れば大丈夫かなと思って、一応メール入れておいたんだけど・・見た？」
「見た、だが気になって探すのはあたりまえであろう？」
「一夏さんがお謝りになることは無くってよ？わたくしが秘密で・・とお願いしたんですし、」
「秘密・・だと！？そんなこと言われてのこのこついていったのかお前は！」
「・・そんな犬みたいに言わなくても、」
「そうでしてよ？そんなに心配なら首輪に鎖でも付ければよろしいのではなくて？」

「「な！」」

一夏とほうき、二人の声が見事にハモる、

（ほんっと、仲がよろしいこと・・）

セシリアはそれにまたまたむぅっと不機嫌になり、胸をそらし、腕を組んだ姿勢を取ると真赤になって黙り込んでしまった二人を置いてさっさと教室に向かう事にした。

「また、教室でお会いしましょう？一夏さん・・」

「あ、ああ、また教室で」

「・・・」

ほうきはまだ先ほどの衝撃が抜けていなかったようで、視界に一夏が入ると、顔を爆発させて再び俯いてしまった。

どうやら今日一日は、先ほどのセシリアの発言が尾を引きそうな感じである・・

「くれぐれも秘密を守って下さいな？」

「あ！ああ、秘密な？」

「な・・秘密とは一体なんだ！？」

「それを言ったら秘密では無くなりましてよ？」

「そういうこと・・オレ達も教室へ行こう、ほうき・・いつまでも顔を爆発させてないで、」

「誰のせいだと思ってる！！」

「オレに怒んなよ・・」

「いいや！お前のせいだ！」

ぎゃいぎゃいと言いあう二人が本当に羨ましく思えてきて、セシリアは規則正しいその歩調を早めた。

もし自分にももう少し、しののさんのような遠慮の無さでもあれば、ああいう風に夫婦漫才の様な事が出来るようになるのかしら？

そう考えてうつむくセシリアには、自分でもそれが無い物ねだりの主張であると解っている、

ここに母国のメイドがいれば、きっとこう言っただろう・・

『お嬢様はお嬢様で、そのままで良いんですよ？』

解っている、一夏ばっかりにもかまけていられない、

（さらにｉｓの技術鍛錬を加えなければ、）

空気中の水分が多く、大抵の景色がおぼろげになるこの国も、冬には乾燥して空の色が濃くなる。

・・その色は母国の空の色。

真っ直ぐにそれを見上げるセシリアの眼は、遥かな高みを目指す鳥の様にひた向きだ、

固く拳を握りしめる彼女を、青い涙の光がまるで応援するかのようにやさしく包みこんでいく・・

（後書き）

キャラクターの中ではセシリアさんが一等好きです。
なぜなら、彼女が一番しっかりとその場に立っている気がするからです、

もし、彼女の恋がかなわなくても、一夏とは母親か姉の様な関係でいてほしいと思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5119q/

青い鳥の幸せ

2011年2月16日20時15分発行